

北海道蘭越町立川1遺跡第4次・5次調査概報

長崎潤一・高倉 純・北村成世・阿部嵩士

はじめに

北海道蘭越町立川1遺跡は1958・1959年に市立函館博物館の吉崎昌一らを中心に発掘調査が行われた。細石刃石器群や有舌尖頭器石器群などが出土しており、北海道旧石器研究の黎明期において、その基盤形成に大きな影響を与えることとなった。その後、研究成果が蓄積されてきているが、細石刃石器群と有舌尖頭器石器群の所属時期やその変遷過程については研究間で見解が分かれている状況である。

このような状況の中、長崎と高倉は両石器群が出土している立川1遺跡の新たな調査に現代的な意義を見出し、これまで計5回の発掘調査を行ってきた。2022年4月から5月に第1次調査、2022年10月から11月に第2次調査、2023年4月から5月に第3次調査を実施している(長崎・高倉・北村・田畑・谷川 2023)(長崎・高倉・北村・阿部・高林 2024)。本稿は2023年10月から11月の第4次調査と2024年4月から5月の第5次調査の成果の概報であり、3報目となる。

第1次から第3次までの調査では、蘭越型細石刃核の石刃核・細石刃核ブランクの集中部(A1拡張区)、有舌尖頭器石器群の製作址(A20拡張区)、赤色破砕片集中(A30拡張区)を確認した。第4次、第5次調査では、これらの発掘区をさらに拡張し発掘を進めることで、遺物の充実や出土状況の精査を図った。

A1拡張区では、第3次調査において函館市博発掘区のものと思われる掘り込みを確認していたが、南東に広がっていることが判明した。A20拡張区では、第1次調査から有舌尖頭器の製作址と考えられる石器集中部が確認されているが、これらがさらに広がることが明らかとなった。A30拡張区では、土製品破片が確認されており、今回の調査においても土製品の破片が確認できた。また、他の発掘区ではほとんど出土していないメノウ製石器が、少数であるが出土している。

なお本稿は、文部科学研究費補助金基盤研究(C)〔「細石刃石器群から有舌尖頭器石器群への石器群編成のダイナミズム」(課題番号22K00990)研究代表者 長崎潤一)及び文部科学研究費補助金基盤研究(B)〔「更新世末の北海道における尖頭器製作・使用行動に関する総合的研究」(課題番号23H00688)研究代表者 高倉 純)の研究成果の一部である。

1. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

第3次調査の際に、TOPCON社製の「Layout Navigator」を用いたデジタル三次元測量を行い、立川1遺跡が立地する舌状台地の大きな地形を把握することができた。そのため、第4次・第5次調査ではまだ掘削が完了していない発掘調査区の掘り下げを中心に行った。掘削は、従来の調査と同様に人力で行い、掘削土は乾フルイにかけた。埋め戻しは、今後も発掘区を掘削する必要があったため、壁面をブルーシートで保護した後に土嚢を敷き、その上を掘削土で充填した。グリッドの呼称名に関しても、従来の調査と変更していない。また、写真撮影は作業前、作業中、遺物取り上げ時などに適宜撮影した。

(2) 調査の経過

第4次・第5次調査の経過について触れる。

第4次調査

10月21日 早稲田隊、東京から移動。

10月22日 作業開始。現場の現状確認。

A20拡張区 (A, B, C19・20)、A30拡張区 (A, B30) の周辺を草刈り。

A20拡張区で D19・20を拡張。

A30拡張区で A31、B31、C30・31を拡張。

C20にて彫器出土。

雨天のため、15:00頃に宿舎に帰る。

10月23日 作業の続き。A20拡張区、A30拡張区の掘り下げ。

ABCD19・20の遺物取り上げ。

A30拡張区で土製品が出土。

10月24日 作業の続き。A20拡張区、A30拡張区の掘り下げ。

10月25日 作業の続き。A20拡張区、A30拡張区の掘り下げ。

10月26日 作業の続き。A20拡張区、A30拡張区の掘り下げ。

A20拡張区から尖頭器の先端部(3層)が出土。

10月27日 作業の続き。A20拡張区、A30拡張区の掘り下げ。

A30拡張区で A29、B29を拡張。

10月28日 作業の続き。A20拡張区、A30拡張区の掘り下げ。

A20拡張区で3層にローム混じり黒色土を覆土とする掘り込みを確認。

10月29日 作業の続き。A20拡張区、A30拡張区の掘り下げ。

10月30日 現場撤収準備。

A20拡張区、A30拡張区の埋め戻し。

10月31日 撤収。早稲田隊、帰京。

第5次調査

- 4月27日 北大隊現場入り。A20拡張区の掘り起こしと拡張を行う（新たに拡張した区：A18、B18、C18、D18、A21、B21、C21、D21）。
- 4月28日 早稲田隊調査合流。A1調査区の掘り起こしと、拡張を行う（新たに拡張した区：ZX0、ZX1、ZX2）。A1拡張区では新たに拡張した区で遺物が出土する。暗褐色の締まりの弱い層位で出土しており、A1拡張区で検出されている吉崎トレンチの覆土であることが考えられる。A20拡張区は概ね2層まで掘削を行う。1～2層においてチップやフレイクを中心とした遺物が、区全体的に集中して出土している。
- 4月29日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区ではチップやフレイクが出土する。また、フルイで細石刃を検出。A20拡張区では、2層から3層上面にかけての層位で両面体加工石器が出土。
- 4月30日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1区で細石刃と調器のスポールと考えられる剥片が出土。A20拡張区でⅢ層においてチップやフレイクを中心とした遺物が出土している。
- 5月1日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区ではZX0、ZX1、ZX2を3層相当まで掘削したのちに、拡張区全体および吉崎調査区と考えられる、掘り上げ土の写真撮影を行う。その後、調査区東側にサブトレンチを設定する（ZW-0.5、ZV-0.5、ZU-0.5、ZT-0.5）。A20区はⅢ層の掘削作業を行う。Ⅲ層において石刃製のエンドスクレイパーが出土している。
- 5月2日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区では2層から細石刃が出土しており、また、サブトレンチから大型の礫が2点出土する。A20拡張区からは3層からクレイパーや黒曜石製の両面加工体石器が出土している。
- 5月3日 A1拡張区サブトレンチの拡張（南側にさらに0.5m拡張）。A1拡張区の北、東、南壁のSFM用写真の撮影。A1拡張区およびサブトレンチ、A20拡張区の掘削作業。サブトレンチからは2層から細石刃が出土している。A20拡張区からは有舌尖頭器の基部や調器が出土している。
- 5月4日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。A1拡張区のサブトレンチは東側（ZT0）でⅢ層まで掘削完了。拡張区はⅢ層および攪乱層の掘削。A20拡張区からは有舌尖頭器の基部などが出土。また、A19からは炭化物の集中と黒みがかかった褐色を呈したローム

- 層、赤色の粒子が面的に検出される。炉跡の可能性が考えられる。
- 5月5日 A1拡張区、A20拡張区の掘削作業。前日に検出された炉跡?の写真撮影を行う
- 5月6日 各トレンチの埋め戻しおよび機材撤収作業を実施。
- 5月7日 早稲田隊、帰京。

2. 調査の成果

(1) 発掘調査区

第4次・第5次調査ではA1拡張区、A20拡張区、A30拡張区をさらに広げるように調査を行った(図1)。それぞれの区の概要を述べる。

A1拡張区は、第3次調査において3点の石刃核が集中して出土しており、関連遺物の確認のために1mずつ南方向に拡張を行った。また、函館市博物館発掘区第I地点のものと思われる掘り込みを検出していたため、こちらの広がりを確認するために、さらに南方向に1m×4mの拡張を行った。第3次調査において検出されていた函館市博発掘区であるが、3層まで掘り下げると1m×1mの深堀を除いて攪乱土が消えた。また、拡張した位置では規則的な形を持たない攪乱土が確認された。1m×4mの拡張区では、配石遺構に関連すると考えられる大型礫が確認された(図2)。

A20拡張区は、第3次調査において2m×3mを掘削し、発掘区全域から石器が出土していた。石器集中部の範囲を確認するために、4m×4mの発掘区に拡張を行った。やや白色を帯びた土壌に、炭化物を多く含む箇所を検出した。また、一部に3層にてローム混じりの黒色土を覆土とする掘り込みを確認したため、掘削を行った(図3)。

A30拡張区は、第1次・第2次調査において赤色破片が出土していた。第4次では赤色破片の出土状況を確認するために拡張を行った。こちらはSFMでの3次元データ作成を行っていないため、写真にて示す(図4)。

(2) 出土層位

A1拡張区、A20拡張区、A30拡張区の層位について触れる。基本的に第3次調査までのものと層位はないが、拡張して改めて掘削した箇所も示す(図5)。

1層：黒褐色表土層(7.5YR3/1)。粘性が弱く、しまりは弱い。クマザサによる浸食が見られる。

2層：暗褐色土層(7.5YR3/4)。粘性がやや弱く、しまりは弱い。1mm～6mm程度のローム粒が見られる。3a層との境界は不整合。耕作土と考えられる。遺物出土。

3a層：黄橙色ローム層(7.5YR7/8)。粘性がやや強く、しまりはやや弱い。赤、白、黒のスコーリアを少量含む。全体はハードロームであるが、上部はソフト化している。ハードロームとソフトロームがまだら状に混じっており、氷河性の土壌攪乱が起きたと考えられる。

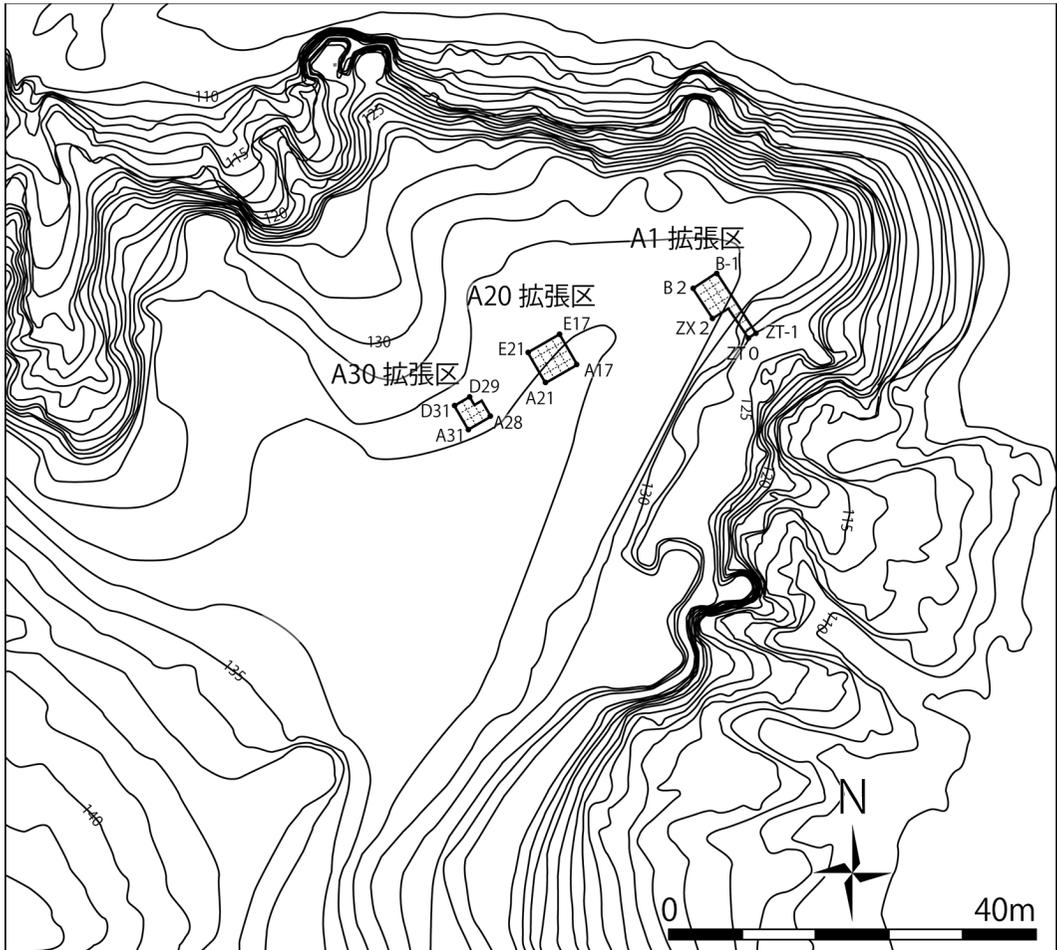
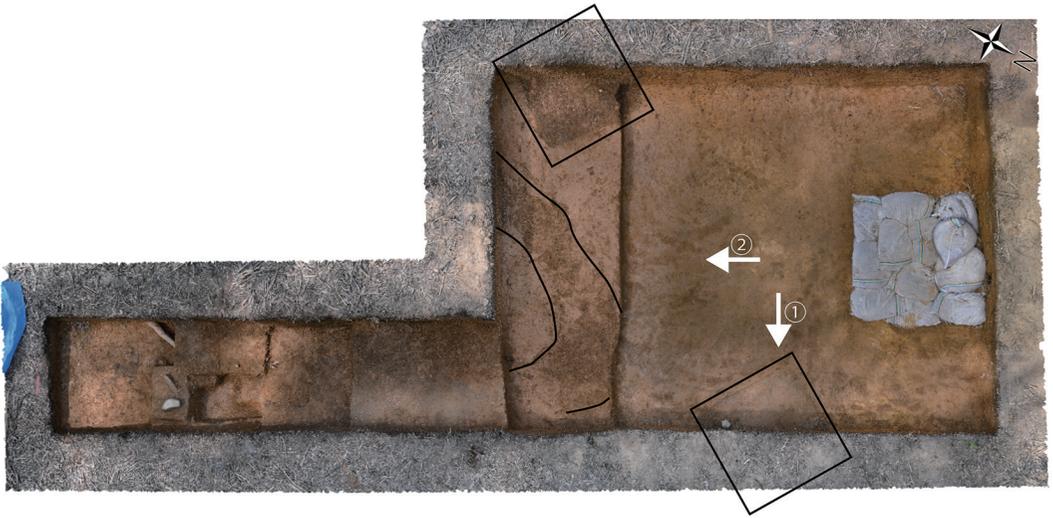


図1. 第4次・第5次発掘調査区



①東壁



②南壁

図2. A1 拡張区



図3. A20拡張区



図4. A30拡張区（北から撮影）

上部から中部にかけて遺物出土。

3b層：黄橙色ローム層（7.5YR7/8）。粘性がやや強く、しまりは弱い。4層の黄色火山灰を含む。混じる火山灰の粒子は上方へ向けて減少する。4層との境界は凹凸が激しい。火山灰の削剥が起こっていたと考えられる。

4層：黄色火山灰層（2.5Y7/8）。粘性が弱く、しまりはやや強い。黒褐色の粒子を含む。最下層に明褐色シルトの火山灰の薄層（厚さ7mm～10mm）が堆積。ワンフォールユニットの中で変化したものと考えられる。

5層：褐色ローム層（7.5YR4/3）。粘性が強く、しまりはやや強い。1mm程度の黒スコリアを微量含む。3層と比べやや暗い。

6層：橙色土層（7.5YR6/8）。粘性が強く、しまりは弱い。10mm程度の安山岩の角礫を含む。5層のロームに7層の砂礫が混じったもの。

7層：にぶい橙色砂層（7.5YR7/4）。粘性がやや強く、しまり弱い。10mm～60mm程度の安山岩の角礫を含む。各層5～20mmの厚さのラミナ状堆積。

(3) 出土分布と遺物

第4次調査ではA20拡張区、A30拡張区から石器456点、土製品35点が出土した。第5次調査ではA1拡張区、A20拡張区から石器1086点が出土した（表1・図6-図8）。また、第4次・第5次出土遺物のうち32点を図示した（図9-図15）。

図9-1は彫器である。C20グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。素材剥片は背稜構成より稜付き石刃であると考えられる。右側縁上端部に表裏面を取り込む剥離を施し彫刀面としている。表面の左側下半部には原礫面が残置される。周縁に加工は見られないが、彫刀面と思われる個所が認められるため彫器とした。

表1. 第4次調査遺物表

	有舌尖頭器	尖頭器	石刃	細石刃	彫器	スクレイパー	石核	両面加工石器	二次加工を有する剥片	微細剥離を有する剥片	剥片	チップ	礫	土製品	計
20拡張区	0	1	0	1	2	0	0	0	0	1	166	261	6	0	438
30拡張区	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	8	6	2	35	53
合計	0	1	0	2	2	0	0	0	0	2	174	267	8	35	491

表2. 第5次調査遺物表

	有舌尖頭器	尖頭器	石刃	細石刃	彫器	スクレイパー	石核	両面加工石器	二次加工を有する剥片	微細剥離を有する剥片	剥片	チップ	礫	土製品	計
1拡張区	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	43	113	19	0	181
20拡張区	2	1	0	8	1	3	0	3	2	1	196	676	12	0	905
合計	2	1	0	14	1	3	0	3	2	1	239	789	31	0	1086

図9-2は彫器である。C20グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。素材剥片は石刃である。上端部に背面からの加撃で平坦面を作り、そこを打面とし削片を作出し彫刀面としている。基部付近には急斜度の剥離が一部認められる。打面部は欠損しており、打面を確認することはできない。

図10-3は尖頭器の先端部である。A19グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。表裏面は丁寧な調整が施されており、先端部を作出している。基部が折損しており、全体形状を把握することができないため、有舌尖頭器であるかは不明である。

図10-4は細石刃である。C31グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。下半部は折損している。両側縁は平行であり、反りは少ない。左側縁には微細剥離の痕跡が認められる。

図10-5は細石刃である。C19グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。上端部、下端部ともに折損している。また、右側縁の一部も折損している。左側縁には微細剥離の痕跡が認められる。

図10-6は剥片である。C19グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。表面は主要剥離面と同一の加撃方向による連続的な剥離が見受けられる。裏面は節理面を大きく取り込む。下半部は折損しており全体形状を把握することはできない。打面は原礫面が残置されている。

図10-7は使用痕のある剥片である。A31グリッド2層より出土。石材はめのうである。上端部を折損しており、打面が失われ素材剥片の全体形状を把握することはできない。左側縁に微細剥離を有する。

図11-8は両面体加工石器である。C21グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。表裏面に大ぶりの剥離を加え整形し、断面D字を呈している。一部周縁に細かな剥離が加えられている。底部付近にバルブが発達しており、素材剥離面を有する。底部に原礫面が残置されている。原礫から剥離された大型の剥片を尖頭器へと加工していく過程において、比較的初期の段階に位置するものと考えられる。

図11-9は尖頭器である。B18グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。表裏面ともに均等な剥離によって整形されている。右側縁の先端から下半部にかけて微細剥離が見受けられる。左側縁下端部には剥離によって抉りを作成していることが見受けられ、潰れ痕も同様に観察される。底部においても同様に潰れ痕が見受けられる。

図11-10は有舌尖頭器の基部である。A18グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。表裏面ともに丁寧な調整が施され、舌部の右側縁、左側縁ともに潰れ痕が見受けられる。底部には原礫面を残す。折れ面において折損時の方向とは異なる方向による剥離が見受けられる。

図12-11は有舌尖頭器の基部である。A18グリッド3層より出土。石材はメノウである。表裏面ともに丁寧な調整が施され、右側縁に潰れ痕が見受けられる。下端部は素材面を残置し平坦にしている。

図12-12は両面加工石器である。D21グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。表面は上部から加工を加えた後、下部から平坦な剥離による加工を加え細かな調整加工を施している。裏面は下部より平坦な加工を加えた後、右上部から平坦な加工を加え、細かい調整を施している。器面の調整が加えられた後、器体上面に剥離面が見受けられるが作業面に設定されるであろう右側縁は欠損しており、スポールを飛ばしたことによる剥離であるは不明である。加えて、最大厚がやや上部による。上記の特徴からは、細石刃核である可能性も考えられる。

図13-13は二次加工のある剥片である。C21グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。上端部を折損しており、打面が失われ素材剥片の全体形状を把握することはできない。右側縁にブランディングを施している。一部には平坦な加工も見受けられる。

図13-14はスクレイパーである。B18グリッド3層より出土。石材は頁岩である。縦長剥片素材であり、下端部にかけて厚みが増す。下端部に急斜度の加工を加え、弧状に整えそこを刃部としている。両側縁には細かな微細剥離が認められる。上部は欠損しており、器体全体の形状を把握することはできない。背稜構成からは素材剥片の主要剥離面と同一の加撃方向から3枚剥片が剥離されていることが伺える。

図13-15はスクレイパーである。B21グリッド3層より出土。石材は頁岩である。上部が欠損しており、素材剥片の形状を把握することは困難である。下端部に急斜度の加工を加え、弧状に整え刃部としている。背稜構成からは、素材剥片の主要剥離面と同一の加撃方向から2枚剥片剥離されていることが伺える。

図13-16は彫器である。D20グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。上端部に剥離を施しそこを打面として、左側縁上半部に表裏を取り込む3枚の剥離を加えそこを彫刀面としている。左側縁には節理面を取り込んでいる。右側縁にはブランディングが施されている。右側縁の上半部から左側縁の基部付近にかけて平坦剥離が施されている。裏面においても平坦剥離が施されバルブを除去している。

図14-17は二次加工のある剥片である。C21グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。下端部に急斜度の剥離が施されており、また左側縁にもブランディングによる加工が施されている。剥離の切り合い関係から左側縁の一連の加工が下端部の加工よりも新しいことが見受けられる。右側縁と上端部は折損しており、全体形状を把握することはできない。右側縁折れ面上半部には、微細剥離が観察される。

図14-18は使用痕のある剥片である。A18グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。上端部を折損しており、打面が失われ素材剥片の全体形状を把握することはできない。左側縁と右側縁の下端部に微細剥離を有する。表面左半部に原礫面を残す。

図14-19は使用痕のある剥片である。C19グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。上部が欠損しており、打面を確認することはできないが、表面に対向する剥離が認められ剥片全体が

湾曲していることからポイントフレックであることが推定される。右・左側縁の中部から下端部に微細な剥離が観察される。

図15-20は細石刃である。A21グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。上端部は折損しており、全体形状を把握することはできない。右側縁に微細剥離の痕跡が認められる。

図15-21は細石刃である。B21グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。下半部は折損しており全体形状を把握することはできない。上端部には丁寧な頭部調整が施されている。

図15-22は細石刃である。A18グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。下端部は一部折損している。平面形状がやや左に湾曲する。

図15-23は細石刃である。ZX0グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。下端部は一部折損している。左側縁の一部に微細剥離の痕跡が認められる。上端部には丁寧な頭部調整が施されている。

図15-24は細石刃である。ZX0グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。下端部は一部折損している。左下半部に一部ガジリ痕が認められる。上端部にはわずかに頭部調整が施されている。

図15-25は細石刃である。ZV0グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。上端部、下半部は折損しており全体形状を把握することはできない。

図15-26は細石刃である。ZT0グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。下端部が一部折損している。

図15-27は細石刃である。ZW0グリッド2b層より出土。石材は硬質頁岩である。下端部が一部折損している。上端部には丁寧な頭部調整が施されている。

図15-28は細石刃である。C18グリッド3層より出土。石材は黒曜石である。上端部、下端部ともに折損しており全体形状を把握することはできない。左側縁には微細剥離の痕跡が認められる。

図15-29は細石刃である。ZV0グリッド2層より出土。石材は硬質頁岩である。下半部は折損しており全体形状を把握することはできない。上端部には頭部調整が施されている。

図15-30は細石刃である。ZU0グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。上端部、下端部ともに折損しており全体形状を把握することはできない。右側縁の一部に微細剥離の痕跡が認められる。

図15-31は細石刃である。ZV0グリッド2層より出土。石材は黒曜石である。下端部が一部折損している。上端部には頭部調整が施されている。

図15-32は細石刃である。C21グリッド3層より出土。石材は硬質頁岩である。上端部、下端部ともに折損しており全体形状を把握することはできない。左側縁の一部に微細剥離の痕跡が認められる。

なお、土製品は現在分析中であるため、追って報告する次第である。

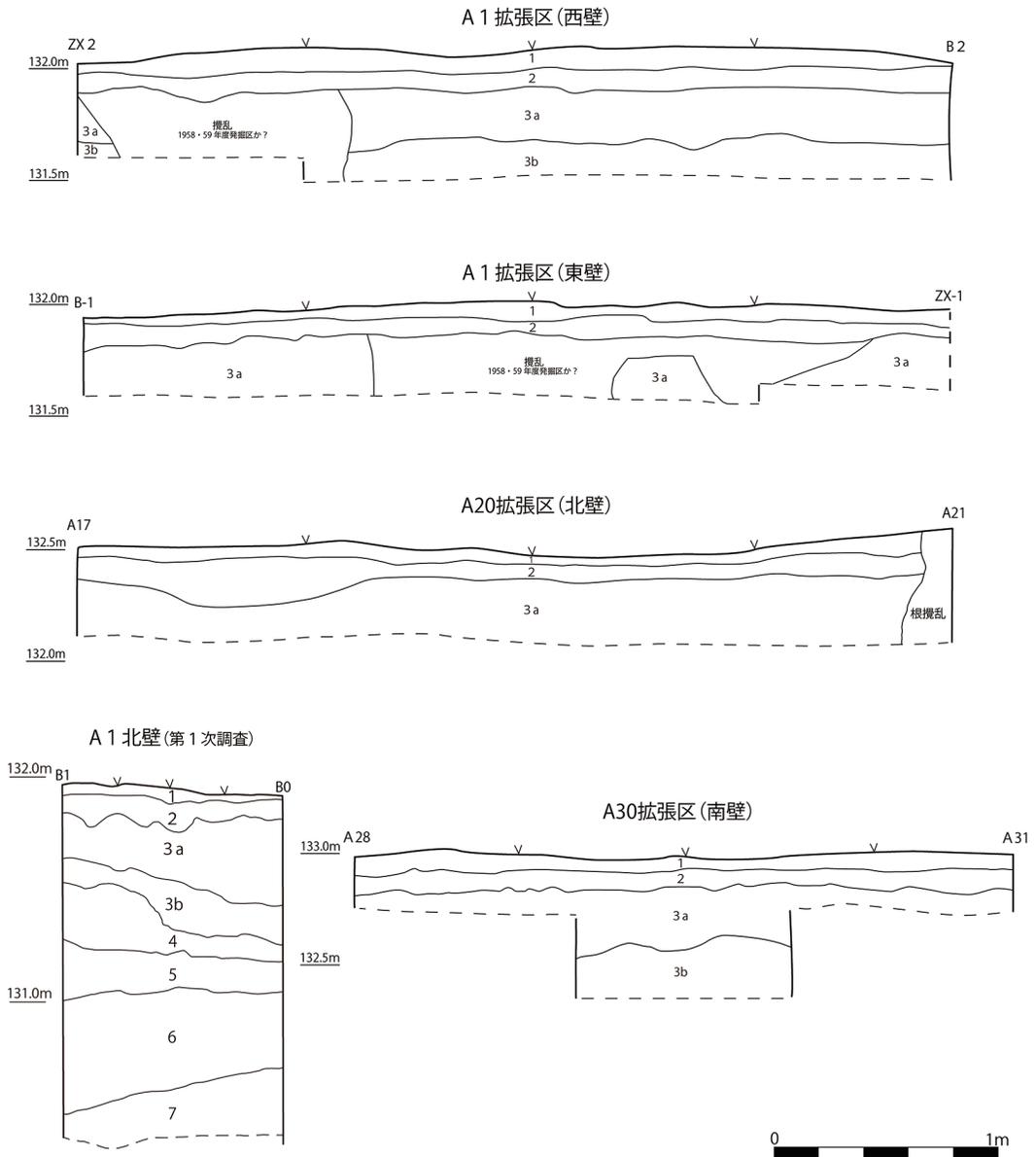


図5. 発掘区セクション

A1 拡張区

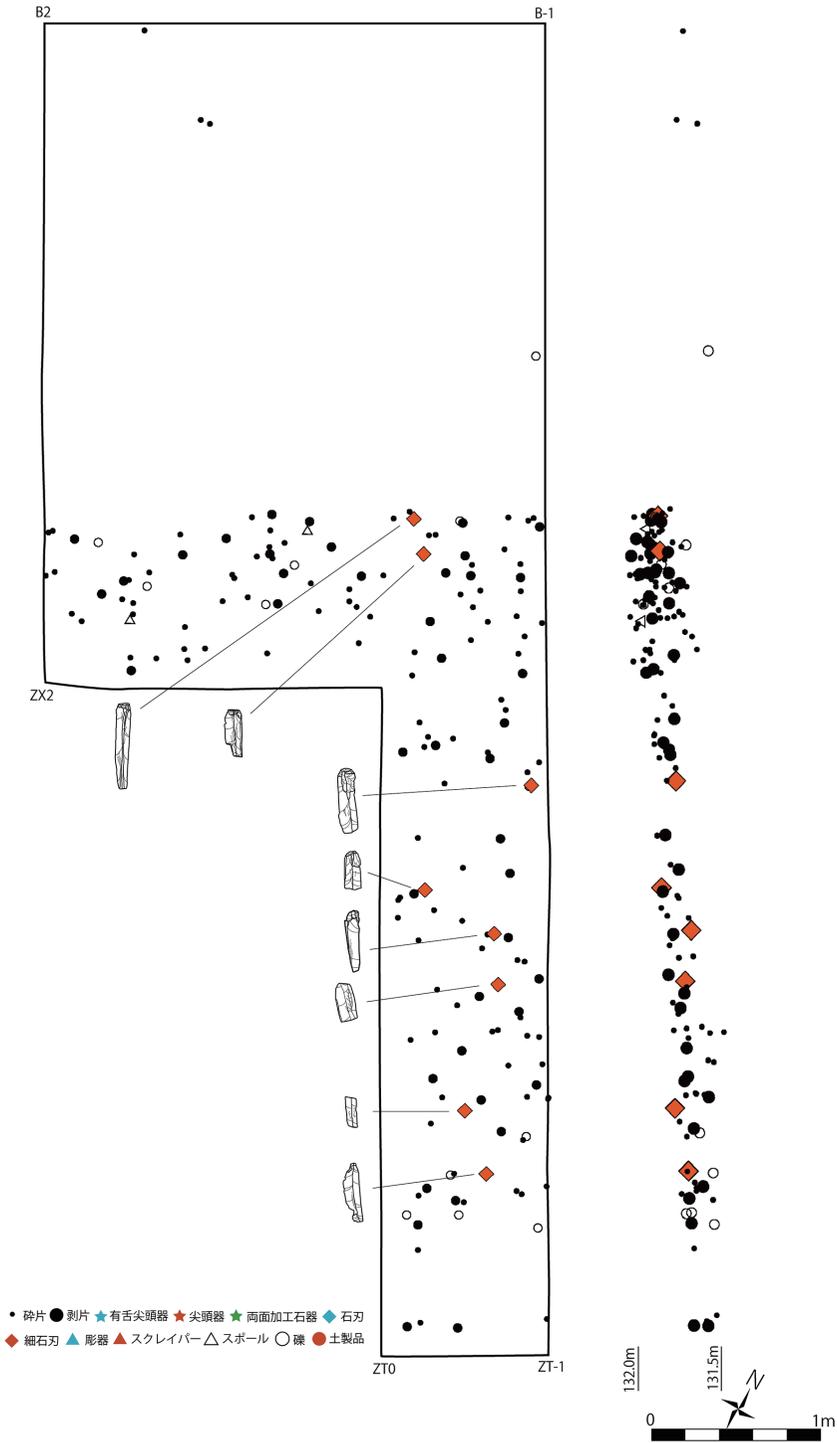


図6. 遺物出土分布(1)

A20 拡張区

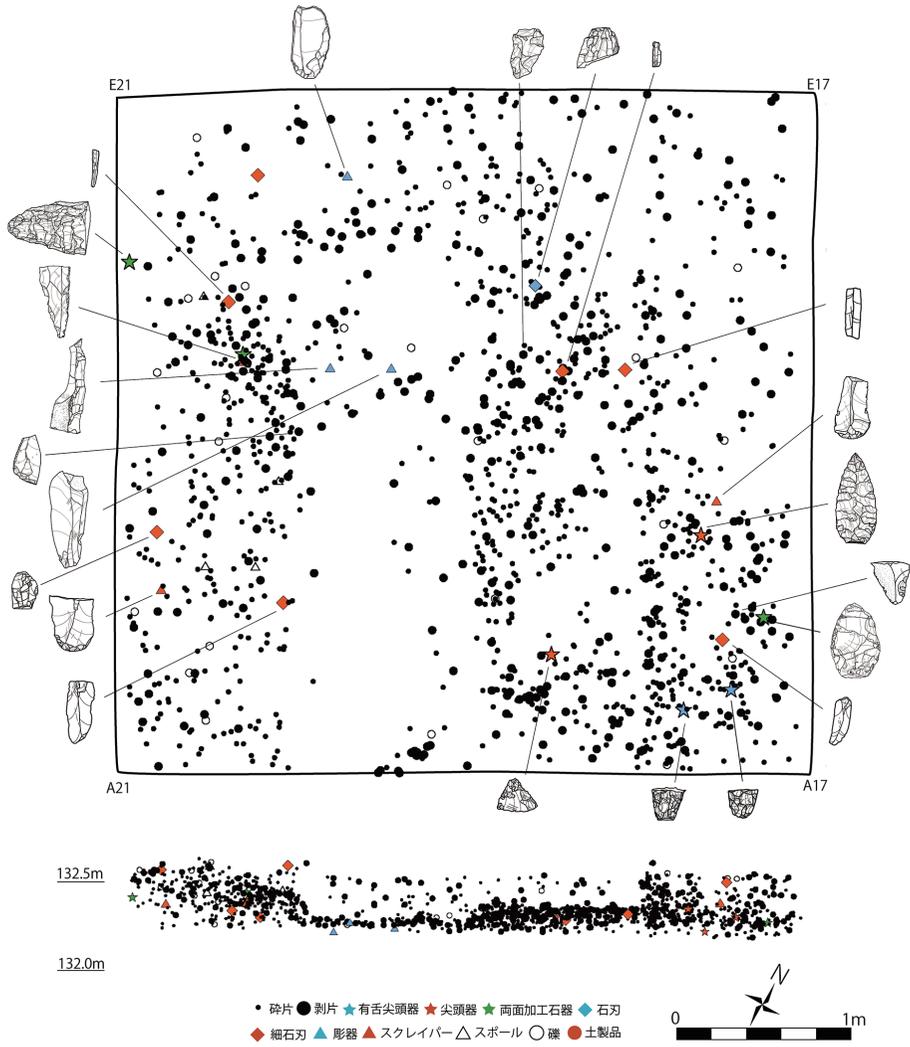


図7. 遺物出土分布 (2)

A20 拡張区

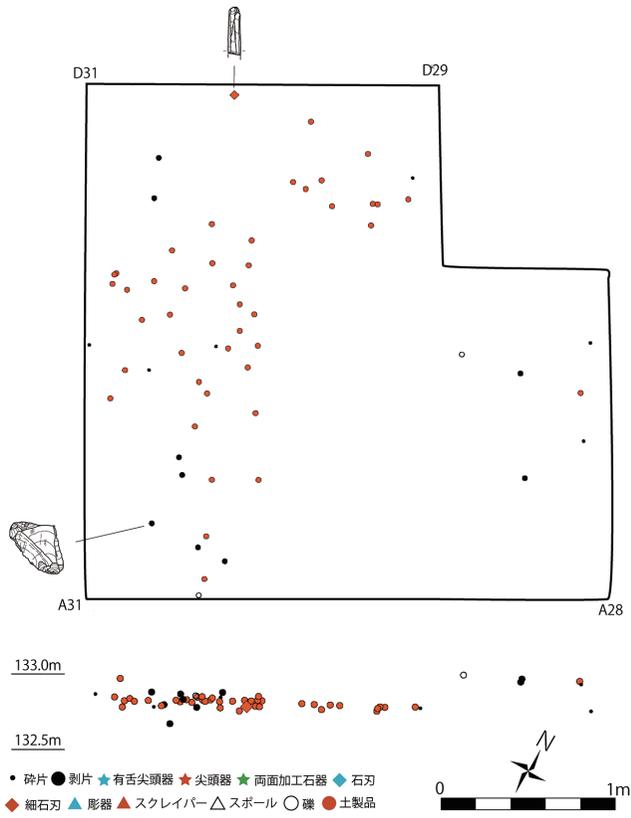
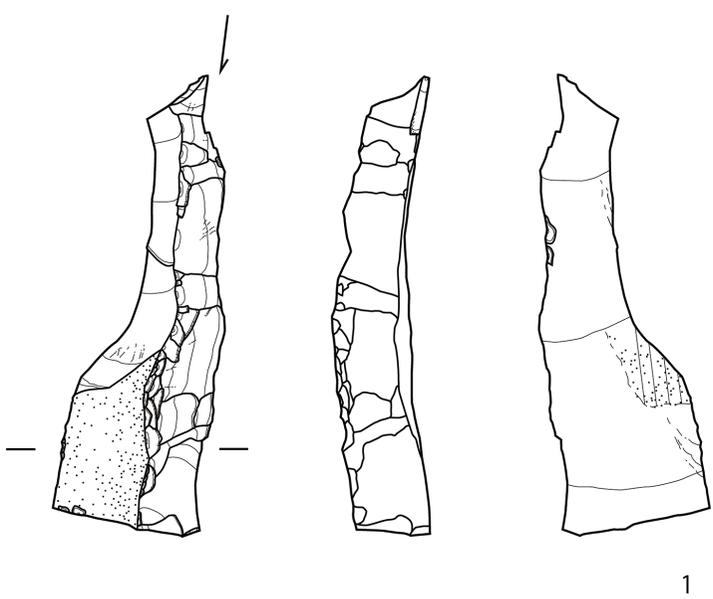
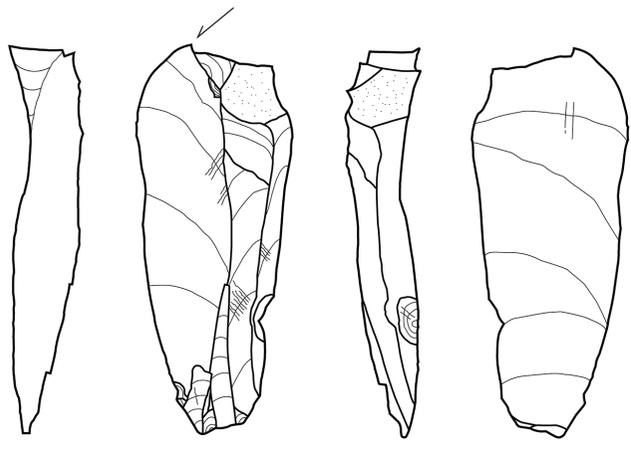
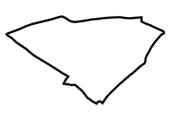


図8. 遺物出土分布(3)



1



2



图9. 石器实测图版(1)

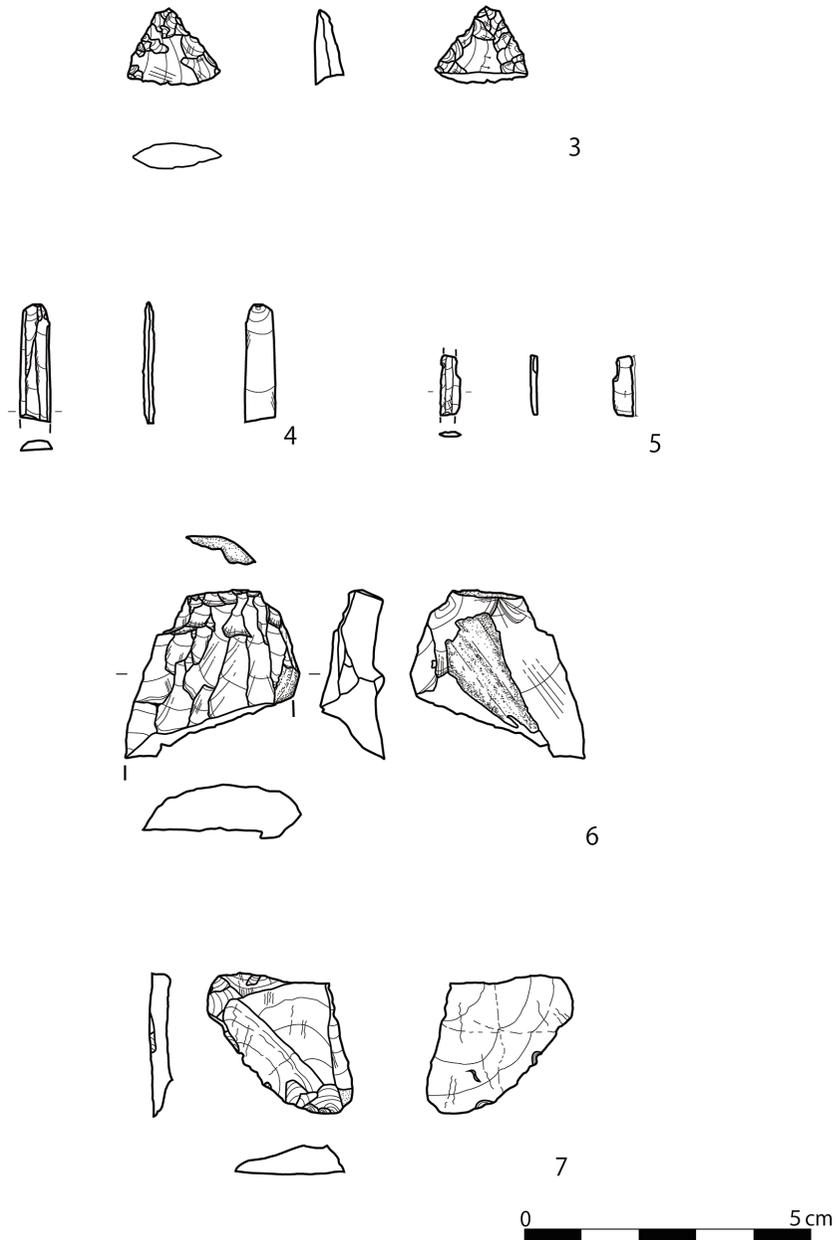


図10. 石器実測図版（2）

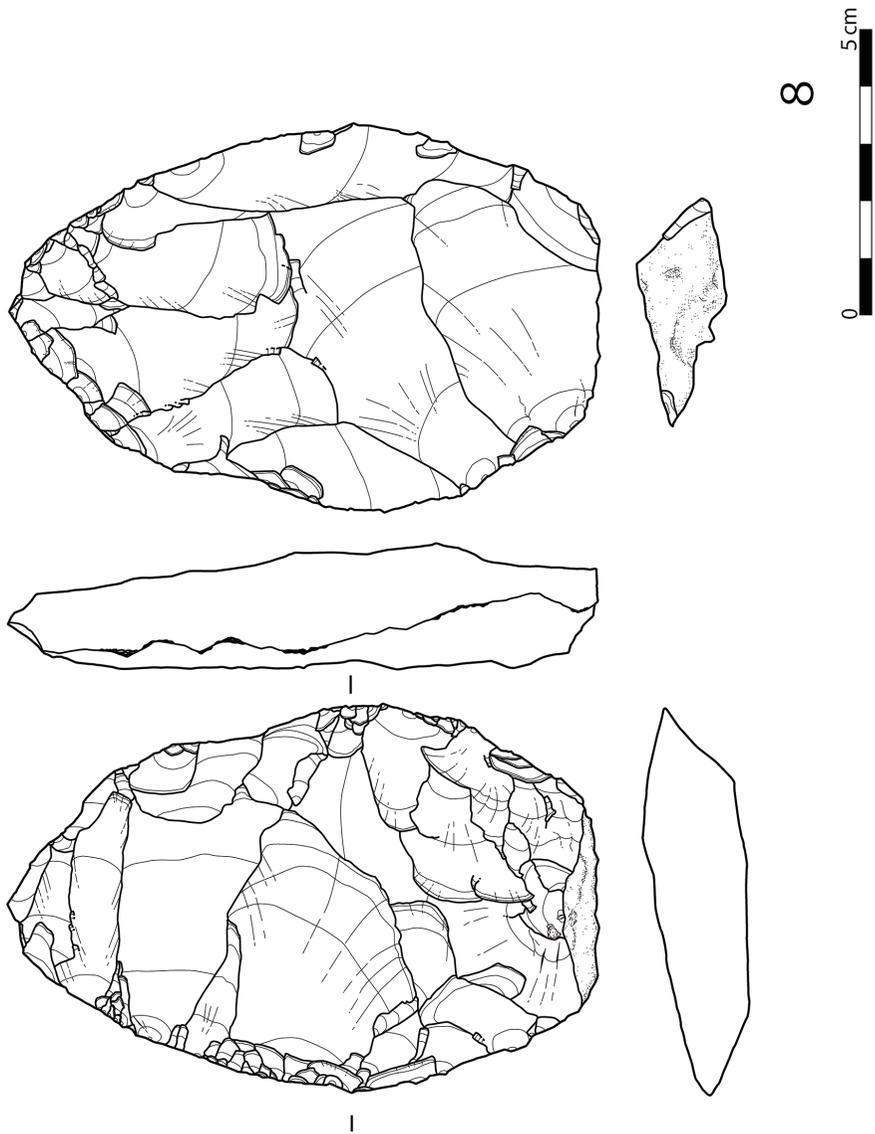


图11. 石器实测图版(3)

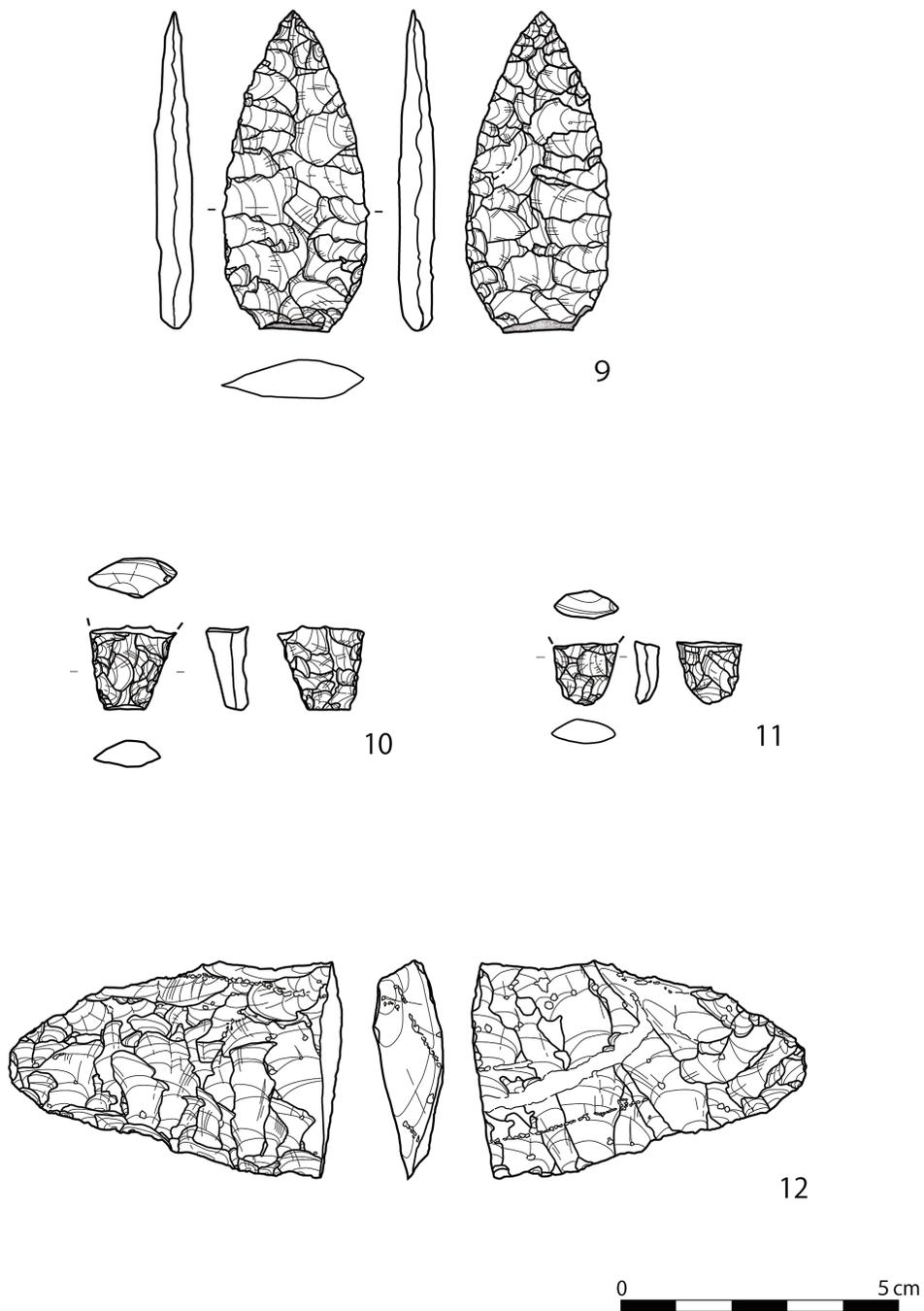
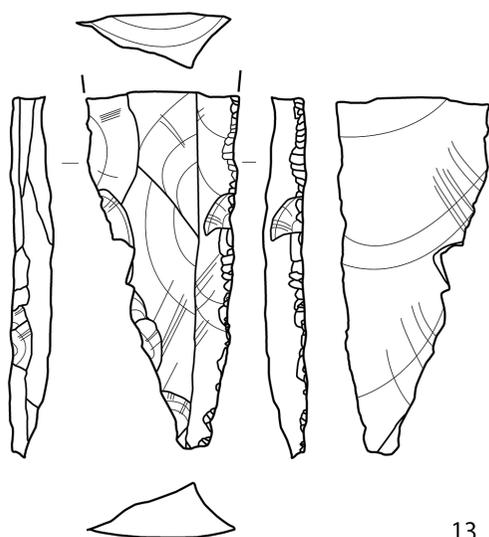
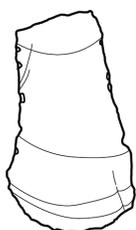


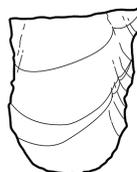
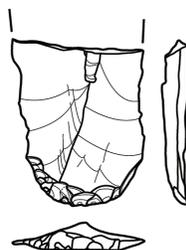
图12. 石器実測図版(4)



13



14



15



16



图13. 石器实测图版(5)

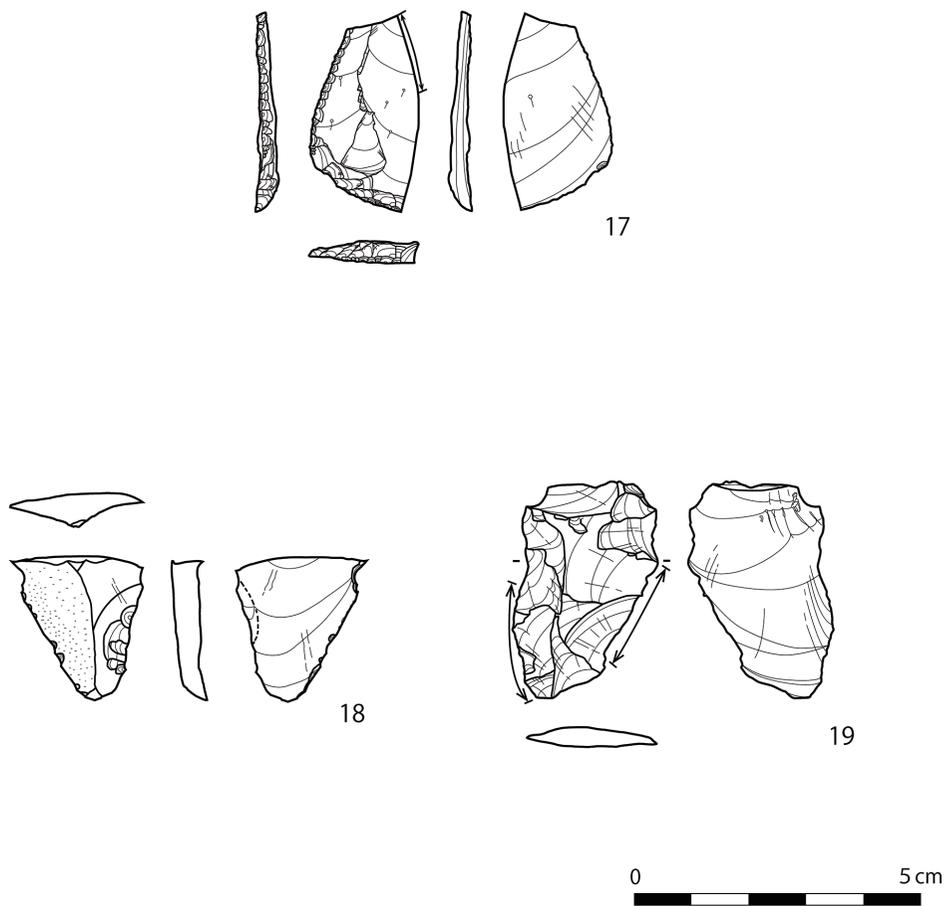
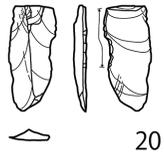
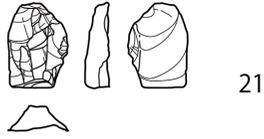


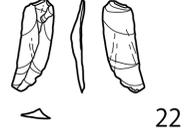
図14. 石器実測図版(6)



20



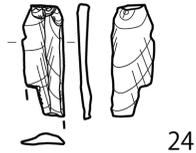
21



22



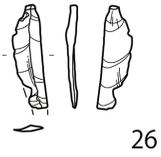
23



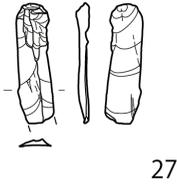
24



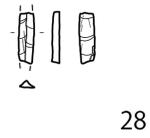
25



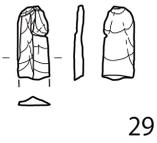
26



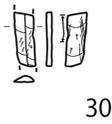
27



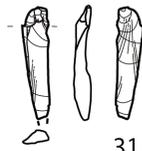
28



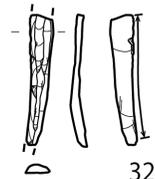
29



30



31



32



图15. 石器实测图版（7）

3. 今後の課題及び展望

(1) 炉・配石遺構

A1 拡張区では、大型の礫が集中して出土した（図16）。これらは函館市博発掘の影響を受けたと考えられる箇所から発見されており、一部は原位置を保っていない可能性がある。また、これらの礫が配石遺構に関連するものかどうかは確証が得られていないため、今後さらに周辺の拡張調査や掘削を行い、礫の数量や分布を確認する必要がある。さらに、攪乱の影響を受けていない地点から配石遺構を検出できれば、当時の生活環境をある程度推定できる可能性がある。現在、立川1遺跡では蘭越型細石刃石器群および有舌尖頭器石器群が確認されているが、これら2つの石器群の層位の区分に寄与することができるだろう。

A20拡張区では、やや白色を帯びた土壤中に炭化物を多く含む箇所を検出した（図3）。炉の可能性はあるが、まだ全体を掘り終えていないため、さらなる検証が必要である。仮に炉であれば、石器が全域から出土しているA20拡張区において、どの石器が炉に関連するものであるかを検討する必要がある。特に、被熱痕跡を有する石器の分布状況から検討していきたい。炉であることが確認できれば、放射性炭素年代測定の精度向上に寄与する可能性が高い。

どちらも発掘調査期限内に全てを掘り下げることができなかった。次回調査において、様相を明らかにし、追って報告する次第である。



図16. 大型礫

(2) 函館市博発掘区の確認

第3次調査においてA1拡張区から函館市博発掘区と見られる掘り込みを確認していた。第4次・第5次調査では南方向へと拡張し、更に1m×4mの拡張を行った。掘削を続けた結果、従来想定していた掘り込み攪乱土が消え、約1m×1mの3層以降まで入り込む深堀を2か所確認した(図2)。これが函館市博発掘区第Ⅰ地点であると考え、第Ⅱ地点は第1次調査において掘削を行ったA10発掘区近辺に位置することになる。しかし、A10発掘区ではほとんど石器が出土しておらず、函館市博発掘区第Ⅱ地点との関連性を確認することができなかった。石器集中が想定より緊密であるか、第Ⅱ地点がやや南にずれ込む可能性がある。

(3) 石刃核の集中部について

第3次調査において出土した3点の石刃核について、その後A1拡張区の掘削を継続したが、新たな石刃核は確認されなかった。

調査期間中には、ニセコ町有島記念館が所蔵する富士見遺跡の5点の石刃核を実見する機会を得た(図17)。富士見遺跡は、尻別川によって開析された谷の右岸近くに立地している(図18)。これら5点の石刃核は採集資料ではあるものの、形態および使用技術から、蘭越型細石刃核石器群に属するものと考えられる(狩太1957、高倉・鈴木編 2015)。

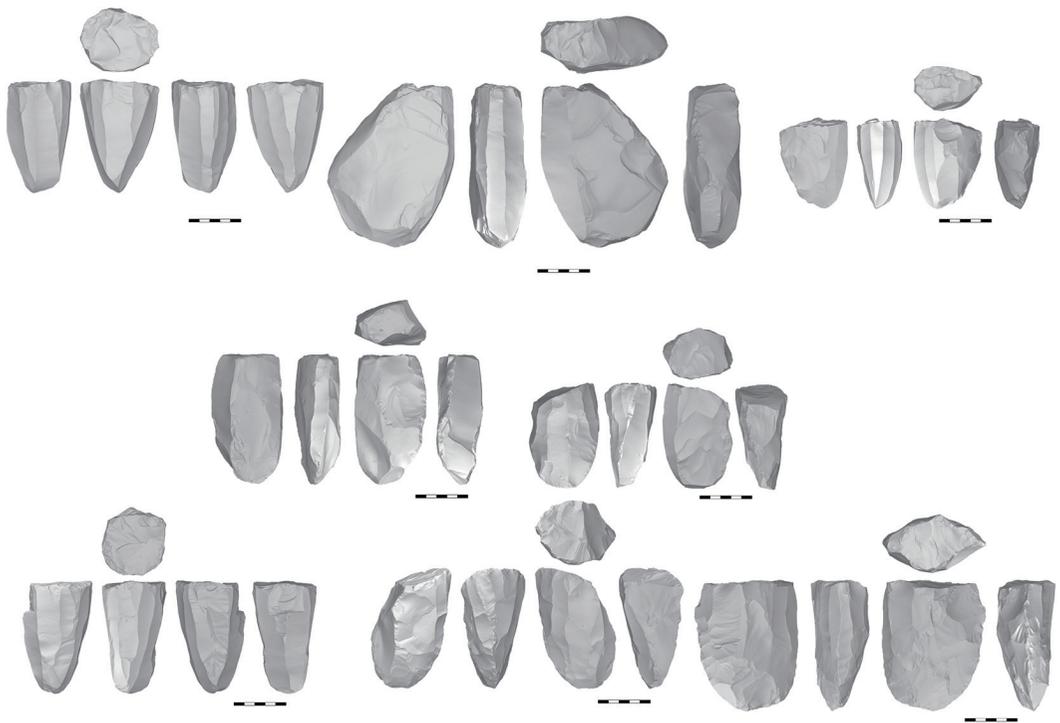


図17. 立川1遺跡石刃核(上段)・富士見遺跡石刃核(中・下段)

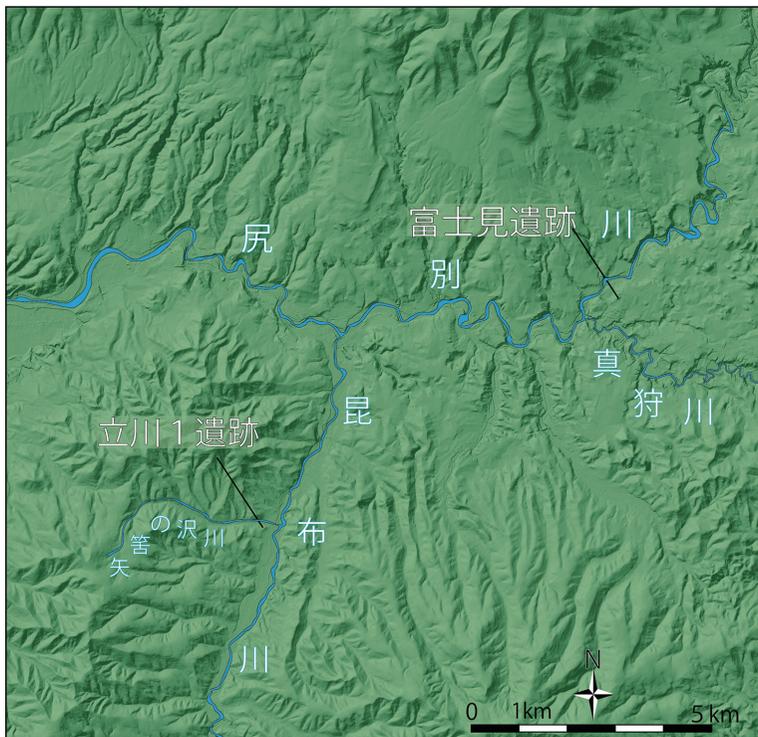


図18. 立川1遺跡と富士見遺跡

立川1遺跡から出土した石刃核は、それぞれ異なる段階に属している。これは、先行研究で指摘されている蘭越型細石刃石器群における「ブランクリダクション戦略」(藤田 2007)の一環として解釈できる。このような石刃核を一群として残すことで、同じ地点に再び戻った際に多様な道具の製作が可能になる石材消費戦略が想定される。特に、立川1遺跡は、渡島半島の硬質頁岩地帯と黒曜石原産地である赤井川の中に位置しており(図19)、硬質頁岩の不足を回避するために、このような戦略が採用されたと考えられる。石刃核の出土は、立川1遺跡を利用していた遊動集団における資源消費戦略に関する示唆を豊富に提供していると言える。

(4) 帯広市空港南 A 遺跡について

2022年度に実施された帯広市空港南 A 遺跡の発掘調査において、立川1遺跡と極めて類似した有舌尖頭器石器群に関連する資料が出土した(北海道埋蔵文化財センター 2024)。空港南 A 遺跡の有舌尖頭器石器群は En-a 古砂丘の上層にあたるⅡ～Ⅲ層から出土する。7つの石器集中(LC-1から LC-7)が確認されており、石器接合や出土遺物内容から同一石器群に位置すると考えられる。石器集中1は11.4×7.9mの範囲に広がる。有舌尖頭器は石器集中1から点取り遺物として11点、石器集中1内及び隣接する箇所からフルイ一括として11点が出土している。これらフル

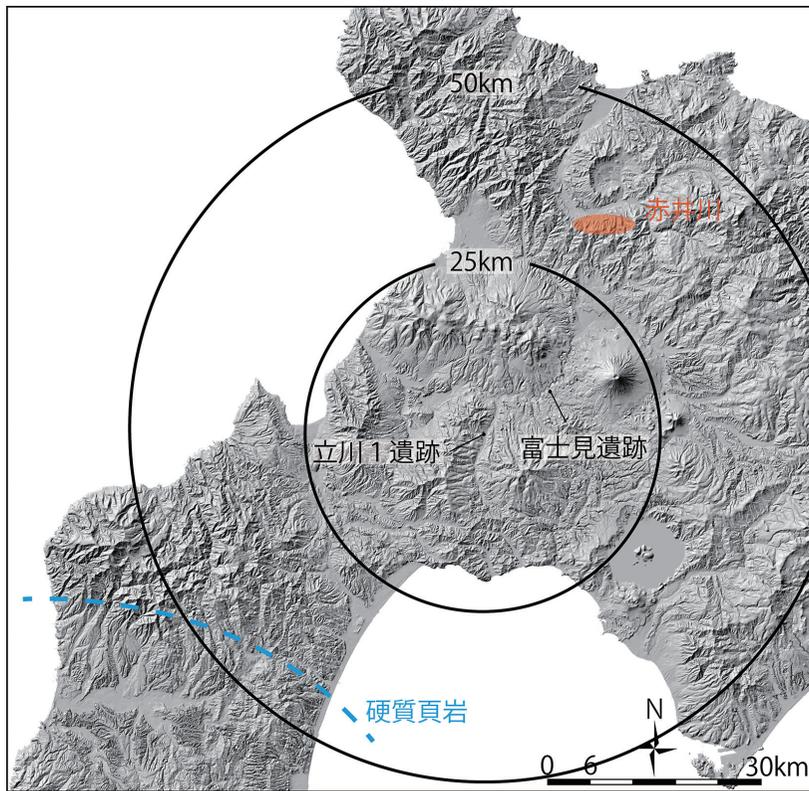


図19. 石材地図

イ一括遺物も石器集中1に極めて関連する遺物であると言える。有舌尖頭器は黒曜石製のものが舌部のみのものが多く、2点（接合して1点）がメノウ製である。

立川1遺跡 A20拡張区は現時点で4m×4mであるが、その全域から石器が出土しており、空港南A遺跡の石器集中1がより広範囲であることを考慮すると、A20拡張区の石器集中もさらに広がる可能性がある。A20拡張区では彫器削片の出土がほとんど見られないが、空港南A遺跡石器集中1では61点の彫器削片が出土している。有舌尖頭器石器群における石器集中において、彫器の使用は遺跡の性格を反映し多様な性質を有する可能性がある。また、比較的細身の黒曜石製の有舌尖頭器と、その他の石材による幅広の有舌尖頭器（立川1遺跡：硬質頁岩、空港南A遺跡：メノウ）が確認されたことから、製作技術や石材の消費において石材間に何らかの差異があると考えられる。有舌尖頭器が頻繁に加工された石器集中部を比較・検討することで、有舌尖頭器がどのような形態で遺跡に持ち込まれ、どのように利用されたかを、遺跡ごとに明らかにすることができるだろう。立川1遺跡や空港南A遺跡のように有舌尖頭器石器群が確認されている遺跡や、有舌尖頭器が単独で出土している遺跡など、多様な出土パターンを包括的に検討することで、有舌尖頭器石器群の実態を解明できると考える。今後も立川1遺跡の発掘調査を続けていく上で、

特に帯広市空港南 A 遺跡の資料に関しては、資料の実見なども行い、詳細な検討を行う必要があるだろう。

(5) 有舌尖頭器の年代について

先述した帯広市空港南 A 遺跡において、石器集中 1 から出土した炭化物を対象に行われた放射性炭素年代測定の結果、概ね22,100~21,400cal BP を示した（北海道埋蔵文化財センター前掲）。多くの研究者は、有舌尖頭器石器群およびそれに共伴すると考えられる忍路子型細石刃石器群を、晩氷期、特にその後半に位置づけてきた（山原 1998、寺崎 2006、直江 2014など）。しかし、空港南 A 遺跡での測定結果は、これらの見解とは大きく異なる。この結果に従えば、有舌尖頭器石器群や忍路子型細石刃石器群は、En-a 火山灰降下後、比較的早期に出現したことになる。

従来は有舌尖頭器石器群よりも前段階に位置づけられていた細石刃石器群の年代観が逆転し、これまで有舌尖頭器石器群が位置づけられていた時期に該当する石器群が存在しなくなる。また、北海道と本州の有舌尖頭器が一連のものと思なされる場合、北海道の有舌尖頭器石器群が本州出土のものよりも大幅に早期に出現したことを意味する。このような問題に対しては、有舌尖頭器石器群がかなり長い存続期間を持つ可能性も考慮する必要がある。ただし有舌尖頭器石器群の年代を古くしてしまうと、本州草創期や神子柴・長者久保系石斧の年代観との不一致、蘭越型細石刃石器群から忍路子型細石刃石器群までの年代差があまりに短く詰まってしまう点など、問題点も多い。空港南 A 遺跡の年代値をめぐっては慎重な検討・対応が必要なことは言うまでもない。

今後は、技術形態学による年代区分や科学分析の結果に対して、その妥当性を改めて検討することが求められるだろう。特に、有舌尖頭器石器群および諸所の細石刃石器群に関する年代観の再編、あるいは少なくとも再考が必要であり、立川 1 遺跡で得られた調査成果も慎重に議論されるべきであることが分かる。

おわりに

以上、立川 1 遺跡第 4 次調査と第 5 次調査の概要について触れた。

A 1 拡張区では、第 3 次調査で出土した 3 点の石刃核集中に関連する遺物は確認できなかった。しかし、函館市博調査区の確認のために拡張した箇所において、攪乱層出土ではあるが配石遺構に関連すると考えられる礫を確認した。

A20 拡張区では、石器集中部の範囲を確認するために第 3 次調査より発掘区を拡張したものの、依然遺物が出土する状況が続いている。今後、発掘を進めるとともに、石器分布や石器組成についても検討する必要があるだろう。

A30では、土製品破片が数十点出土している。また、他の発掘区と異なりメノウ製の石器が出土している。

また、帯広市空港南 A 遺跡において、立川 1 遺跡と類似する石器群が出土したことは、両者の比較研究が可能になるという点で非常に重要である。有舌尖頭器石器群の編年や年代的位置付けは今まで以上に議論され始めている。関連石器群ごとの石器組成及び出土様相、製作技術、理化学分析などの複合的な側面から、有舌尖頭器石器群を改めて整理し解釈する必要があるだろう。立川 1 遺跡の発掘成果が、研究課題解決にむけて重要な知見を提供することを期待する。

徐々にではあるが、発掘も進んできている。今後も調査を継続し、各発掘区の拡張や様相把握に努めたい。最後に、発掘を許可していただいた地主の会澤 守さま、機材借用などで便宜を図っていただいた蘭越町教育委員会に感謝申し上げます。なお、表 1・2、図 9-図15は鯉沼来人（早稲田大学文学部学部生）に作成を補助いただいた。

引用・参考文献一覧

- 青木要祐 2018 「遠軽町タチカルシュナイ遺跡群の現代的意義」『北海道考古学』54
- 虻田郡狩太町 1957 『狩太遺跡』虻田郡狩太町。
- 安斎正人 1996 『現代考古学』同成社。
- 帯広市教育委員会 2006 『帯広市埋蔵文化財調査報告27：帯広・大正遺跡群 2』
- 北村成世・高倉 純・長崎潤一・Alexandr Ulanov・阿部嵩士・鯉沼来人 2024 「蘭越町立川 1 遺跡出土の石刃核」第22回日本旧石器学会2024ポスターセッション。
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍』東京大学出版会。
- 芹沢長介 1954 「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『駿台史学』第4号。
- 高倉 純・鈴木健治 2017 「北海道ニセコ町西富遺跡の調査」第18回北アジア調査研究報告会発表。
- 高倉 純 2018 『ニセコ町西富遺跡の調査と北海道南部の旧石器研究史』北海道旧石器文化研究会2017年度定例研究会発表。
- 高倉 純 2020 「峠下型細石刃核再考」『日本考古学』50
- 寺崎康史 2006 「北海道の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』
- 千葉英一 1985 「北海道地方の細石器文化」『考古学ジャーナル』No.306
- 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号
- 長崎潤一・高倉 純・北村成世・田畑幸嗣・谷川 遼 2023 「北海道蘭越町立川 1 遺跡第 1 次調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第68輯。
- 長崎潤一・高倉 純・北村成世・阿部嵩士・高林奎史 2024 「北海道蘭越町立川 1 遺跡第 2 次・3 次調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第69輯。
- 直江康雄 2014 「北海道における旧石器時代から縄文時代草創期に相当する石器群の年代と編年」『旧石器研究』第10号。
- 長沼正樹 2005 「日本列島における更新世終末期の考古学的研究：縄文文化起源論と旧石器時代終末期の学説史に着目して」『論集忍路子』1
- 夏木大吾 2017 『遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点発掘調査概要報告書—2017年度調査—』
- 橋詰 潤 2009 「「刺突具」利用の変遷に関する一試論：新潟県域における杉久保石器群から縄文草創期の比較から」『新潟県の考古学』II
- 橋詰 潤 2015 「後期更新世末期の本州中央部における両面加工狩猟具利用の変遷」『第四紀研究』54(5)
- 橋本勝雄 1988 「縄文文化起源論」『論争・学説日本考古学』第2巻 雄山閣 宏明 1985 「5. V層の遺構」

北海道蘭越町立川1遺跡第4次・5次調査概報

『湯の里遺跡群—津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書—』財団法人 北海道埋蔵文化財センター。

福井淳一 2001 「旧石器時代の顔料とその生産—北海道柏台1遺跡出土顔料関連遺物の分析を中心に—」『北海道考古学』第37輯、北海道考古学会。

藤田征史 2007 「立川遺跡第I地点出土資料の分析」『市立函館博物館研究紀要』17。

北海道埋蔵文化財センター 1985 『今金町美利河1遺跡』

北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市柏台1遺跡』

北海道埋蔵文化財センター 2024 『帯広市空港南A遺跡』

役重みゆき 2012 「蘭越型細石刃石器群の技術構造」『東京大学考古学研究室紀要』26

山原敏朗 1998 「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」『北海道考古学』第34輯。

吉崎昌一 1959 「立川遺跡の出土状態と遺物」「結語」『立川—北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡における無土器文化の発掘調査—』市立函館博物館紀要 No.6 吉崎昌一 1978 「立川以後」『立川』復刻版別刷

図版出典一覧

図15-図17（北村ほか2024）より引用

他は筆者作成